亀倉コレクションの朝鮮民画と古典図鑑本について

高 晟埈

はじめに

新潟県立近代美術館・万代島美術館の所蔵作品の中でも、亀倉雄策旧蔵作品、いわゆる「亀倉コレクション」の 281 件の作品は、この世界的グラフィック・デザイナーの交友関係やインスピレーション源がいかなるものであったのかを知るために有益であるのみならず、ロシア・イコンや朝鮮民画、古典図鑑本、さらにはアメリカのデコイ（鳥の置物）などのある程度のまとまった作品を含むことによって、西欧や日本の美術に偏りがちであったそれまでの同館のコレクションに厚みを加えることにもなっている[1]。

そうした亀倉コレクションの中でも、ロシア・イコンについてはその来歴や図像学的な意味について既に考察を加えてきたが[2]、一連の朝鮮民画や古典図鑑本についてはこれまで研究の対象となってこなかった[3]。そこで本稿では、新潟県立近代美術館の 2011 年度のコレクション展第 4 期への出品にあわせ、亀倉コレクションの朝鮮民画および古典図鑑本について改めて考察する[4]。

1　朝鮮民画

「朝鮮民画」あるいは「李朝民画」は、朝鮮時代の庶民の実用的な民俗絵画で、結婚や還暦などの儀礼や魔除け、開運などの実用目的のために、屏風や掛軸にしたりして用いられた絵画であり、その表現の素朴さや大胆さによって古くから人気を集めてきた[5]。

そもそも「民画」という言葉は、民芸運動の創始者である柳宗悦が日本の「大津絵」などの民俗絵画を指して使い始めたもので、柳は 1950 年代に朝鮮民画を数多く収集し、1957 年には「朝鮮画を眺めて」、1959 年には「不思議な朝鮮民画」を著し、この独特な世界観を広く世に知らしめた[6]。もっとも、朝鮮時代後期の実学者・李圭景による文集『五洲衍文長箋散稿』では、これらの絵画を「俗画」と呼んでいるが、文化人として圧倒的な影響力を持っていた柳宗悦による「民画」という用語が、現在では一般的に用いられている。

日本で「朝鮮民画」の作品が重点的に収集されるようになったのは、日韓の国交が正常化し、日本が高度経済成長期を迎えた 1970 ～ 80 年代のことである。この時代の最大のコレクターとしては染色家の芹沢銈介が挙げられるが、亀倉雄策もこの朝鮮民画を積極的に収集し、1982 年には『李朝の民画』という画集を編集するに至る[7]。

亀倉雄策が本書に寄せたエッセイ[8]によると、この出版の計画はプロデューサーの志和池昭一郎が亀倉に持ち込んだものであるが、亀倉も「次々と奇想天外な着想、新鮮な色彩、見事な構成、デザイン的明快さが連続することで次第に興奮していく自分を押さえることができなかった」として、この出版計画に全面的に関わっていくことになった。

亀倉雄策は画集の装丁やレイアウトの仕事を数多く手掛けているが、本書は亀倉のブックデザインの中でも代表作とされる[9]。本書においてはそれのみならず、亀倉みずからが編集者となって制作の陣頭指揮を取っており、また、みずからの朝鮮民画コレクションからも 4 点登場させている。亀倉は本書の編集者として、柳宗悦以来の「民芸」の枠にとらわれない民画紹介を心がけたと述べている。編集顧問としては、建築家でコレクターの趙子庸、美術史家の水尾比呂志、画家の李禹煥を迎えており、序文は建築家の磯崎新や哲学者の谷川徹三に依頼している。本書は大著であるがゆえに出版が難航したらしいが、志和池昭

1
亀倉雄策が没したのは 1997 年 5 月。その後、一連の「亀倉コレクション」は 1998 年 3 月に新潟県立近代美術館に寄贈された。そして翌 1999 年にはそのコレクションおよび追悼作品を集めた展覧会が新潟県立近代美術館で開催されている。宮崎俊英・小見秀男（編）『デザイナー亀倉雄策展』長岡：新潟県立近代美術館 , 1999 年。

2
高晟埈「亀倉雄策旧蔵イコン「キリストの復活と十二大祭」についての覚書」『新潟県立近代美術館研究紀要』8(2008), pp.9-17. 同論文の内容については、2008 年 4 月に大阪市立大学で開催された第 6 回日本ビザンツ学会において口頭発表を行ったが、その際に富田知佐子先生より貴重なご意見をいただくことができた。

3
1999 年の展覧会の際には、朝鮮民画、古典図鑑本それぞれ 2 点のみの出品で、前掲の展覧会図録においても詳細な考察は加えられていない。

4
次の投稿記事も参照。高晟埈「斬新デザインの源泉―亀倉雄策コレクション展」『新潟日報』2012 年 1 月 17 日

5
民画についてはテーマ別にまとめた次の文献が手頃である。정병모『무명화가들의 반란 민화』서울：다할미디어 , 2011. 次も参照。片山真理子「朝鮮民画―制作背景と中国民間版画の存在を視座に」『高麗美術館研究紀要』6(2008), pp.119-132.

6
柳宗悦「朝鮮画を眺めて」『民藝』59(1957)、柳宗悦「不思議な朝鮮民画（特集朝鮮の民画）」『民藝』80(1959).

7
亀倉雄策・志和池昭一郎（編）『李朝の民画』（全 2 巻）東京：講談社 , 1982 年。

8
亀倉雄策「ロマンチスト志和池昭一郎の執念 李朝の民画」in:『李朝の民画』東京：講談社 , 1982 年 (now in: 亀倉雄策『曲線と直線の宇宙』東京:講談社 , 1983 年 , pp.183-191). 以下の亀倉の文章の引用は本書より。

9
この分野における亀倉の仕事に関しては次を参照。田中一光「亀倉雄策のブックデザイン」『クリエイション』21(1998), pp.130-137.

一郎が前年に起きた台湾での飛行機事故によって同行した脚本家・向田邦子と共に亡くなったため、その「弔い合戦のように」出版が実現したと亀倉は述べている。

また、1989年には東京の草月会館で「李朝生活画展」が開催されるが、そのポスターをてがけたのも亀倉雄策であった。この展覧会の主催者である財団法人草月会は、1927年に勅使河原蒼風によって創設されたいけばなの流派・草月流が1955年に設立した団体である。亀倉雄策は1950年代初頭に勅使河原蒼風の作品に初めて触れ「これが、いけばなか」と衝撃を受けたと語っているが、その後蒼風の個展の図録をデザインしたのを契機に、機関紙『草月』のデザインなど草月会の仕事を長年手掛けるようになった[10]。草月会館で開催される美術展覧会のポスターや図録の多くも亀倉のデザインによるもので、「李朝生活画展」もその一つであった。

10
勅使河原宏「草月と亀倉雄策の仕事」『クリエイション』21(1998), pp.90-95.

以下、新潟県立近代美術館・万代島美術館所蔵となった亀倉コレクションの朝鮮民画6点の概要を記す。作品タイトルは原則として箱書の表記に従ったが、箱書のないものについては作品の主題をタイトルとした。

① 飛鴨蓮花図（図1）— 19世紀／紙本着色／80.0 × 27.2㎝

画面下方の蓮池から上方に向かって蓮の茎が伸び、画面中央には二輪の蓮の花が配されている。そして画面上方では、つがいの鴨が蓮の花の上空を飛んでいる。4点組の作品のうちの1点であるが、朝鮮時代には、蓮をモティーフにした作品はこのように何点か組で描かれることが多く、屏風に仕立てて鑑賞されることが多かった。また、つがいの鴨は、朝鮮半島のみならず日本や中国においても、永遠に切れない深いきずなの象徴として親しまれてきた。夫婦仲良く子どもの面倒見もよい鳥であるため、家庭の平和や愛情のシンボルとして朝鮮民画のモティーフとしてよく登場する。

② 蓮花魚影図（図2）— 19世紀／紙本着色／80.0 × 27.2㎝

「飛鴨蓮花図」と同シリーズである本作では、視点がやや低く取られ、蓮の花は画面上方に配されている半面、画面下方の蓮池を大きく描いている。蓮池の中には、おそらくは鯉と考えられる魚が2匹、つがいで描かれている。魚は群れをなして回遊し、子どももたくさん産むことから、子沢山の象徴や家族団らん、家庭平和の象徴として数多く描かれてきた。ここではつがいで描かれているが、その象徴するものは「飛鴨蓮花図」と同様であろう。

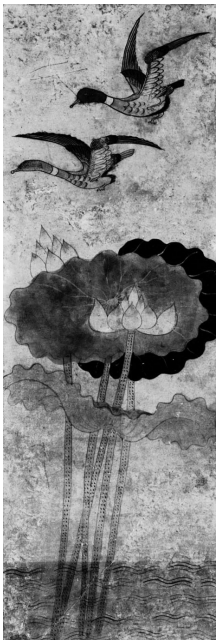
図1 （朝鮮民画）飛鴨蓮花図

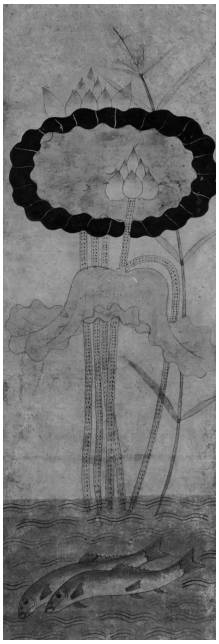
図2 （朝鮮民画）蓮花魚影図

③ 鶏頭花鳥図（図 3）— 19 世紀／紙本着色／ 60.5 × 36.7㎝

ケイトウ（鶏頭）は、韓国語の固有語では「メンドゥラミ」と呼ばれるが、漢字語では「ケグァンファ（鶏冠花）」と呼ばれる。花が鶏のトサカに似ていることから来る名称という点では日韓共通であるが、ケイトウは朝鮮半島においてはさらに深い意味が与えられている。鳥のトサカが官吏の冠に通じることから、官職への登用、出世を願う花として理解され、庭に植えられる他にもこのように花鳥画の画題として広く用いられた。朝鮮時代中期の女流画家・申師任堂による「草蟲図」はとりわけ有名で、現行の 5,000 ウォン札にも描かれている。鳥と共に描かれることも多く、「喜禄加官図」あるいは「喜禄可冠図」として、カササギと共に描かれることが多い。本作品の場合は、カササギではなく鴨と思われる姿の鳥が描かれているが、これは庶民向けの民画であるゆえの自由な解釈の結果であろう。

図 3 （朝鮮民画）鶏頭花鳥図

④ 群鳥図（図 4）— 19 世紀／紙本着色／ 61.5 × 36.5㎝

画面下方にはクジャク（孔雀）と思われる大きな鳥が 2 羽描かれ、その上方にはザクロ（石榴）の木に集まる小さな鳥たちが描かれている。鳥たちは 2 羽ずつ描き分けられており、クジャクと合わせると 3 双のつがいの合計 6 羽が描かれていることになる。朝鮮半島においてザクロは、日本においてと同様に、中に種が多く詰まっていることから多産の象徴であり、子宝に恵まれるようにと婚礼用のチマ・チョゴリの文様として描きこまれたり、本作品のように民画のモティーフとしてもたいへん好まれた。本作は、ザクロが背景にあり、さらに鳥がそれぞれつがいで描かれていることから、婦人や新婚夫婦の部屋の装飾として用いられたものと考えられる。

図 4 （朝鮮民画）群鳥図

⑤ 草虫図（図 5）— 20 世紀初頭／紙本着色／ 51.6 × 31.6㎝

画面下方にはデフォルメされた岩山が配され、そこから画面上方に向かって野菊と思われる花が配されている。岩山の隣の地面からは、おそらくはボタン（牡丹）と思われる草花が描かれ、画面上方へと向かって茎を伸ばしている。これらの草花の上方、画面の最上部は、2 羽の鳥と 1 匹のハチ（蜂）が飛び交う構図で描かれている。ハチは、東洋絵画においては「封侯福禄」を象徴するものである。「封侯福禄」（Fēng Hóu Fú Lù）とは、諸侯に取り立てられ幸福と俸禄を得ることを意味し、同じ読みの「蜂」（Fēng、ハチ）、「猴」(Hóu、サル)、「蝠」(Fú、コウモリ)、「鹿」(Lù、シカ）の 4 種類の動物で表現される [11]。

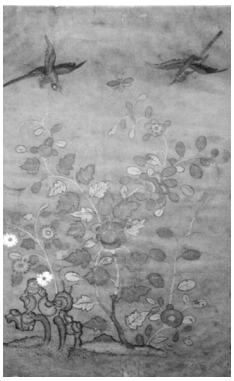

図 5 （朝鮮民画）草虫図

11
民画にとどまらず朝鮮時代の草虫図を集めた展覧会が高麗美術館で開催された。『花卉草蟲―花と虫で綴る朝鮮美術展』京都：高麗美術館，2011 年。図録を寄贈していただいた同館の片山真里子氏に感謝申し上げたい。

⑥ 蓮花図（図 6） ― 19 世紀／紙本着色／ 80.0 × 27.2㎝

本作では、満開の蓮の花が 3 輪描かれている。その周辺には 2 羽の鳥がその周囲を飛んでいるが、構図の中心はやはり蓮の花である。東洋絵画では一般的に、蓮の花は仏教思想や極楽の象徴として描かれることが多かったが、朝鮮民画の場合、そうした仏教的含意は強くなく、むしろ単純に清涼な雰囲気をかもし出すモティーフとして捉えられ、蓮を描いた絵画は、夏のあいだ板の間に飾られていた。また、泥水の中からでも可憐な花を咲かせることへの感激から、朝鮮半島では蓮はとりわけ好まれ、伝統的な庭園には蓮池が造成されることが多かった。

図 6 （朝鮮民画）蓮花図

2 古典図鑑本

亀倉コレクションの大きな核の一つが 18 ～ 19 世紀の西洋の古典図鑑本である。植物や蝶、鳥、昆虫などが銅版画で刷られ、その上から 1 点ずつ水彩絵具で彩色されたこれらの図鑑を亀倉が集め始めたのは 1940 年代頃からのことで、最終的におよそ 20 点程度のコレクションとなっており、中には現在の市場価格で数百万円にものぼり、これらのオリジナルをもとにした精巧なファクシミレ版が出版されている書籍も何冊も含まれている [12]。

しかしながら、200 年以上も経過した冊子本であるため、当初の表紙が取れかかっていたり、ページがばらばらになっていたりするものもあり、そういう冊子本に出会った際には、亀倉はイタリアのミラノやヴェネツィアで表紙用のマーブル紙を購入し、またモロッコ革で製本することを楽しみにしてきたという。製本の際には、かねてから付き合いがあった凸版印刷や大日本印刷の担当者に頼み込み、それぞれの印刷会社の中で 1 人しかいない腕のよい職人にお願いしたようだ。

依頼された職人は久しぶりにしっかりとした手作りの本が作れるといって大喜びしたそうで、また製本された書籍を受け取った亀倉も「嬉しくて嬉しくて、手にとっては何度も何度も眺めすかした」という。しかし、いざ製本代の支払いの段になると、印刷会社からは、これはとても商業ベースに乗る仕事ではなく、作業の工賃の計算が不可能で値段の付けようがないため、代金を受け取ることはなかったというエピソードが残る。

以下、亀倉コレクションの古典図鑑本の概要を記す。日本語の書名については、日本語訳がすでにあるものはそれに従ったが、ほとんどは今回試訳したものである [13]。

① ロバート・ジョン・ソーントン『フローラの神殿』 ロンドン：ソーントン発行 , 1812 年刊（図 7）
THORNTON, Robert John, *Temple of Flora, or Garden of the Botanist, Poet, Painter, and Philosopher*, London: Robert Thornton, 1812.

この図鑑の編者ソーントン（1768-1837 年）は、ロンドンで薬種商を営む本草家の孫に生まれた。そして当時としては革新的な植物分類学として提唱されたリンネの人為的分類法に関心を持ち、やがてリンネの分類学体系にのっとった大図鑑を刊行した。この図鑑の植物分類学を美術的に解説するというコンセプトにもとづいて制作されたのが本書である。当

12
古典図鑑本についての亀倉自身の文章は次を参照。亀倉雄策「秘かな楽しみ―古典図鑑本の装幀」『季刊銀花』60(1984), pp.86-92. 以下の亀倉の文章の引用は本誌より。

13
日本語訳があるものは『フローラの神殿』のみ。荒俣宏（編著）『フローラの神殿』東京：リブロポート , 1985 年。また、『フウチョウの自然誌』は慶応義塾にも所蔵されており、日本語の書名は慶応義塾のものに従った。http://www.humi.keio.ac.jp/treasures/nature/contents_j.html（2012/01/26 閲覧）

時の英国で盛んになりつつあったロマン主義的な風景画の概念を取り入れ、前景に描かれた大きな花にその主題と調和する背景が描き込まれている。今日では、世界で最も美しい植物図鑑として評価されている。本書は普及版である第 2 版。

② ロリー父子『ジュネーヴからミラノまでのシンプロン峠を越えるピトレスクな旅』パリ:ディドー・レネ発行 , 1811 年刊 (図 8)

LORY, Gabriel Ludwig & Mathias Gabriel, *Voyage pittoresque de Geneve à Milan par le Simplon*, Paris: Imprimerie de P. Didot l'Ainé, 1811.

本書の挿絵を手掛けたのは、スイス・ロマン主義の画家であるロリー父子 (父 : ガブリエル・ルートヴィヒ／ 1763-1840 年、子 : マティアス・ガブリエル／ 1784-1846 年)。描かれているシンプロン峠は、アルプス山脈のスイスとイタリアのあいだの難所であり、1805 年、ナポレオンによるイタリア遠征の際、大砲を運ぶために広い道が作られた。本書は、このナポレオンによる道路拡張の記録のため、出版者でカルトグラファー (地図製作者) のジャン＝フレデリック・オスターヴァルトがロリー父子に発注したものである。

③『ウェイヴァリーの珠玉 スコット小説名場面集』ロンドン : ヘンリー・ボーン発行 , 1848 年刊 (図 9)

SCOTT, Sir Walter, *The Book of Waverley Gems: In a Series of Engraved Illustrations of Incidents and Scenery in Sir Walter Scott's Novels*, London: Henry G. Bohn, 1848.

ウォルター・スコット(1771-1832 年) はスコットランド、エディンバラ出身の詩人、作家。エディンバラ大学で法学を学び、大学時代には辺境地方を遍歴し、民謡や伝説の収集に熱中した。当初は詩人として活躍するが、のちに小説家に転向した。そして小説家としての第一作が、スコットランドを舞台とした青年士官ウェイヴァリーを主人公とした『ウェイヴァリー』である。英国騎兵大尉エドワード・ウェイヴァリーが休暇旅行で訪れたスコットランドで、貴族の娘ローズに愛され、また一方でフローラという女性に恋をしている間に帰国が遅れ、その結果免職となってしまう。ところがチャールズ・エドワード王子がフランスから上陸し反乱を起こすと、ウェイヴァリーもそれに参加して活躍する、という物語。

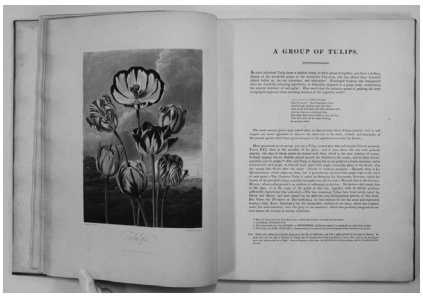

図 7 『フローラの神殿』

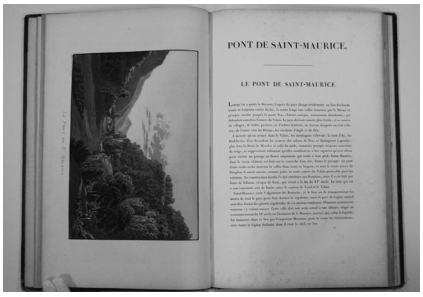

図 8 『ジュネーヴからミラノまでのシンプロン峠を越えるピトレスクな旅』

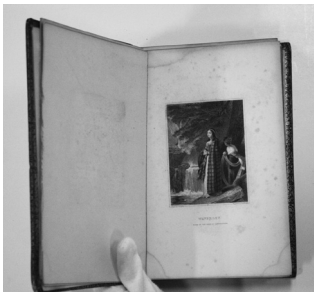
図 9 『ウェイヴァリーの珠玉 スコット小説名場面集』

④ ルネ・プリムヴェール・レッソン『フウチョウの自然誌』パリ：アルトゥス・ベルトラン発行，1835 年刊（図 10）

LESSON, René Primevère, *Histoire naturelle des oiseaux de Paradis et des épimaques*, Paris: Arthus Bertrand, 1835.

著者のレッソン（1794-1849 年）は元来は外科医であったが、コキーユ号の船医として世界を周航するなかで博物学に関心を持ち、各地で貴重な資料を集めることになった。「フウチョウ（風鳥）」はニューギニアを中心に生息している美しい鳥で、その名は「風」を食べて生きるという伝説に由来する。また、たいへん美しい羽を持つことから、楽園の鳥になぞらえて「ゴクラクチョウ（極楽鳥）」とも呼ばれることもある。18 世紀から 19 世紀のヨーロッパでもっとも人気の高かった種である。

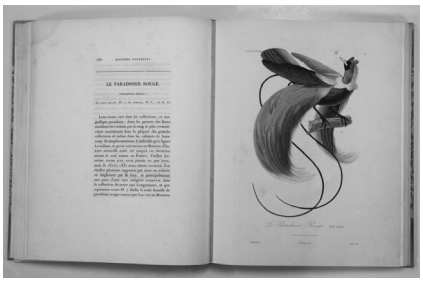

図 10 『フウチョウの自然誌』

⑤ アーサー・ガーディナー・バトラー『蝶・蛾の博物図 大英博物館の所蔵品より』ロンドン：テイラー&フランシス発行，1877 年刊（図 11）

BUTLER, Arthur Gardiner, *Illustration of Typical Specimens of Lepidoptera Heterocera in the Collection of the British Museum*, 3 vols., London: Taylar & Francis, 1877.

博物学者であるバトラー（1844-1925 年）は、大英博物館の学芸員として、鳥類や昆虫の分類や世界各地のクモの研究に長く携わった。なお、大英博物館は 1753 年の開館以来自然史関連の資料も扱う総合的博物館として機能してきたが、本書が出版された 4 年後の 1881 年には自然史部門が分離されてサウス・ケンジントンに移り、自然史博物館として独立した。

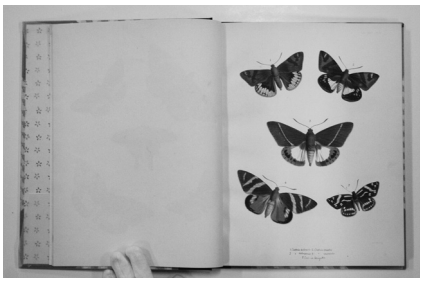
図 11 『蝶・蛾の博物図 大英博物館の所蔵品より』

⑥ ピーテル・クラマー『異国の蝶 アジア、アフリカ、アメリカ』アムステルダム：バールデ&グラヴィウス発行，1774 年刊（図 12）

CRAMER, Pieter, *Papillons exotiques des trois parties du Monde: l'Asie, l'Afrique et l' Amerique*, 2 vols., Amsterdam: S.J. Baalde and N.T. Gravius, 1774.

著者のクラマー（1721-1776 年）は毛織物を扱うオランダ商人であったが、そのかたわら蝶の収集や研究にも力を注いだ。本書はその研究の集大成である。挿絵を手掛けたのは画家のヘリット・ワルテナール・ランベルツ（1747-1803 年）で、1,650 種以上の蝶が実物大で描かれている。リンネの分類法に従った世界の蝶図鑑としては史上初のものである。

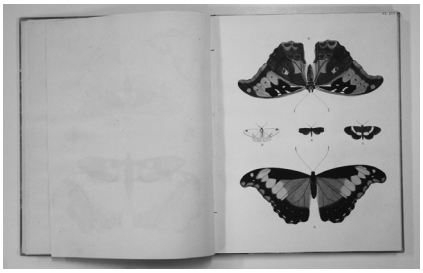
図 12 『異国の蝶 アジア、アフリカ、アメリカ』

⑦ ドミニク=オーギュスト・ルルブーレ『若者のための動物学』パリ：ドリヴォー発行，1860年刊（図13）

LEREBOULLET, Dominique-Auguste, *Zoologie du jeune âge, ou Histoire naturelle des animaux écrite pour la jeunesse*, Paris: Derivaux, 1860.

著者のルルブーレ（1804-1865年）は、フランスの医師であり、また動物学者としても活躍した。当初はストラスブール大学でコレラの研究に従事していたが、そのかたわら動物の解剖学の研究も続けた。やがてストラスブール大学で動物学と比較解剖学を受け持つようになり、同時にストラスブール市立動物学博物館の館長にも就任した。動物学者としては、脊椎動物や魚類、甲殻類の比較発生学を専門とした。

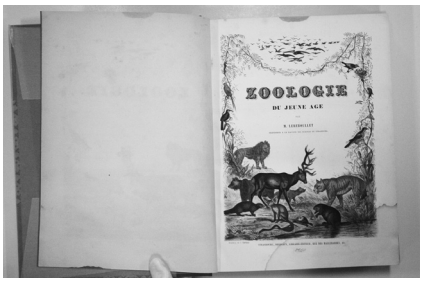

図13 『若者のための動物学』

⑧ エリーザー・アルビン『英国昆虫の自然史』ロンドン：ウィリアム・ジョン・イニーズ発行，1724年刊（図14）

ALBIN, Eleazer, *A Natural History of English Insects*, London: William & John Innys, 1724.

著者のアルビン（1690年頃より活躍。1742年頃に没）は、博物学者でもあり、また水彩画家でもあった。「18世紀で最も偉大な昆虫画家」と呼ばれることもある。本書以外にも『鳥類の自然史』(1731–38年）や『蜘蛛の自然史』（1736年）などを手がけている。アルビンの幼少期のことは不明な点が多いが、おそらくはドイツの生まれであり、ジャマイカを訪問したことがあるとも言われる。当初は水彩画家としてのキャリアを積んでおり、博物学の研究をはじめるようになったのはその後のことらしい。

図14 『英国昆虫の自然史』

⑨ ジョン・ウェストウッド&ヘンリー・ハンフリーズ『英国の蝶類と変態』ロンドン：ウィリアム・スミス発行，1841年刊（図15）

WESTWOOD, John & HUMPHREYS, Henry, *British Butterflies and Their Transformation*, London: William Smith, 1841.

本書はウェストウッドが解説を、ハンフリーズが図版を担当している。ヘンリー・ハンフリーズ（1810-1879年）は英国の画家および博物学者。青年時代にはイタリアで西洋中世の彩飾写本について学び、その後もあらゆる分野について研究を継続した。そして本書のような昆虫に関する書籍

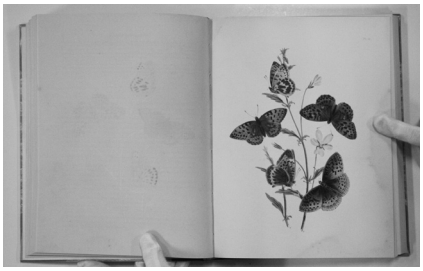
図15 『英国の蝶類と変態』

以外にも、古代ギリシャ・ローマのコインに関する古銭学的な書籍、考古学に関する書籍、そしてさらには印刷技術に関する書物も発表し、多彩な才能を発揮した。

⑩ ハンナ・ゼラー『聖地の野生草花』ロンドン：ジェームズ・ニスベット発行，1875 年刊（図 16）

ZELLER, Hannah, *Wild Flowers of the Holy Land*, London: James Nisbet & Co., 1875.

著者のハンナ・ゼラーは宣教師の夫人で、パレスティナ出身。本書はキリスト教信者の立場からパレスティナで見られる野生植物について図版入りで解説したものである。本書の序文では、次のように本書の意義が述べられている。「この書物の図版が興味深いのは、我らの主（イエス・キリスト）が幼年時代に目にされ、そして主の教えや例え話に登場するまさにその花々を我々の目の前に提示してくれている点である。この地で布教する不屈の宣教師の夫人によってここで取り上げられている花は、ユダエア地域のものでなくナザレの丘、ガリラヤ地域、ゲネサレト地域に見られるものである。」

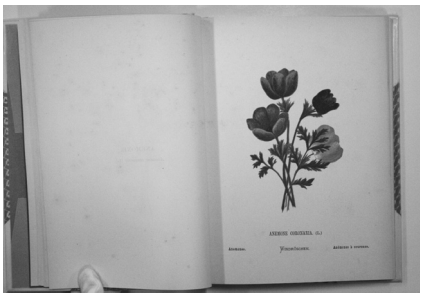

図 16 『聖地の野生草花』

⑪ フランソワ・オランドル『四足の胎生生物と鳥類の博物誌概説』ツヴァイブリュッケン：サンソン発行，1790 年刊（図 17）

HOLANDRE, François, *Abrégé d'histoire naturelle des Quadrupèdes Vivipares et des oiseaux*, 3 vols., Deux-Ponts: Sanson, 1790.

著者はプファルツ=ツヴァイブリュッケン公国（一時フランス領、現在はドイツ領）の博物学者であるが、正確な生没年は不詳。オランドルの業績としては、スコットランドの造園家フィリップ・ミラーの大著『造園家の手引き―果樹園・花壇の造成・管理方法』のフランス語訳がまず挙げられ、これは 1786 年から 89 年にかけて出版された（後にミラーが言及しなかった部分も改訂増補して出版）。次の大作が本書であり、哺乳類と鳥類の図鑑という性格である。オランドルは動植物を含む豊富な知識を買われ、プファルツ=ツヴァイブリュッケン公カール 3 世アウグストの「驚異の部屋」（博物陳列室）の学芸員を任されていたが、この「驚異の部屋」が入っていたカールスベルク城は、フランス革命の一連の混乱の中で 1793 年に破壊された。

図 17 『四足の胎生生物と鳥類の博物誌概説』

⑫ マルティン・レーダーミュラー『顕微鏡世界の歓び』ニュルンベルク：ド・ロノワ発行，1760 年刊（図 18）

LEDERMÜLLER, Martin Frobenius, *Der Mikroskopischer Gemüths- und Augenergötzung*, 2 vols., Nürnberg: de Launoy, 1760.

著者のマルティン・フロベニウス・レーダーミュラー（1719-69 年）は、各地を放浪しなが

ら傭兵や秘書などの仕事をしていたが、1749 年以降はニュルンベルクに居を定め、顕微鏡から見える様々な動植物を描写するようになった。そしてその作業を集大成したのが本書であり、図版の銅版画を手がけたのはアダム・ヴォルフガング・ヴィンターシュミットである。本書で描かれているのは、植物や昆虫にとどまらず、貝やプランクトン、塩の結晶など様々な分野にわたっている。

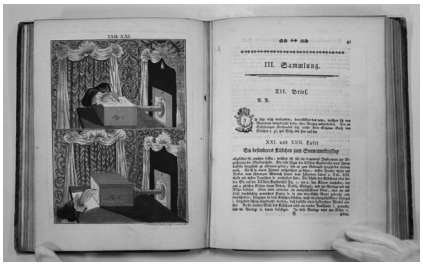

図 18 『顕微鏡世界の歓び』

⑬ セザール・アンリ・モンヴェール&ガブリエル・ロリー『スイス・ベルン州オーバーラントのピトレスクな旅』ロンドン：ルドルフ・アッカーマン発行 , 1823 年刊（図 19）
MONVERT, César Henri & LORY, Gabriel, *Picturesque Tour through the Oberland in the Canton of Berne, in Switzerland*, London: R. Ackermann's Repository of Arts, 1823.

本書は 1812 年にパリで出版された同タイトルの書籍の英訳初版で、挿絵を手掛けたのはマティアス・ガブリエル・ロリーらスイス・ロマン派の画家たちである。彩色銅版画の図版 17 点、地図 1 点（ベルン州の氷河所在図）を含む。17 点の図版は次の通り。①ベルン、②トゥーン近郊、③トゥーンの街並、④トゥーン湖、⑤トゥーン周辺、⑥シュピーツ城風景、⑦トゥーン湖近郊聖ベアト洞窟、⑧ウンターゼーン風景、⑨インターラーケン風景、⑩スタウバッハの滝、⑪フングフラウ眺望、⑫グリンデルドヴァルト氷河、⑬ローセルーヴィ氷河、⑭メイリンゲン、⑮ワイラー橋、⑯ブリエンツ村風景、⑰リンケンベルク城。

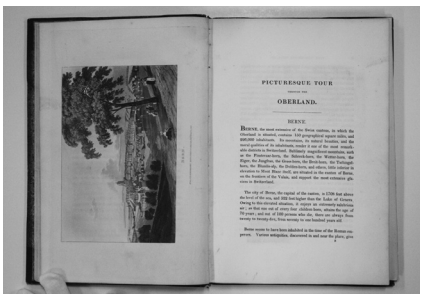

図 19 『スイス・ベルン州オーバーラントのピトレスクな旅』

⑭ アウグスト・ヴィルヘルム・メリン伯『戸外および牧場での狩猟器具使用についての試論』ベルリン－シュテッティン：ヨアヒム・パウリ発行 , 1779 年刊（図 20）
MELLIN, August Wilhelm Graf von, *Versuch einer Anweisung zur Anlegung, Verbesserung und Nutzung der Wildbahnen so wohl im Freyen als in Thiergärten*, Berlin & Stettin: Joachim Pauli, 1779.

著者のアウグスト・ヴィルヘルム・フォン・メリン伯爵(1746-1836 年) はプロイセン貴族の出身。伯爵はハッレで学んだ後、シュチェチン（現・ポーランド領、独名：シュテッティン）近郊のダミゾウにあるみずからの領地に戻り、狩猟を楽しんでいた。領地内には動物園や禽舎を設置する一方、ブフォンやブルグスドルフ、シュレーバー、ブロッホ、ベックシュタインら当時の有名な博物学者と頻繁に文通を行っていた。またメリン伯はベルリンとハッレの自然史学会の会員でもあり、1770 年からは宮廷の侍従も務めた。

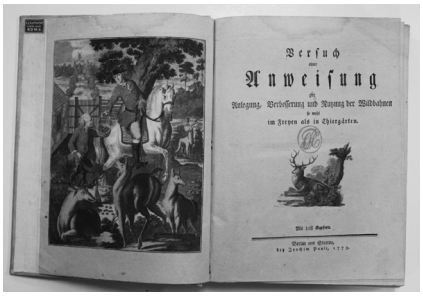

図 20 『戸外および牧場での狩猟器具使用についての試論』

⑮ ヤコブ・ラドミラル 2 世『昆虫の変態観察記』アムステルダム：シャンジョン－エスフェルト発行 , 1740 年刊（図 21）

L'ADMIRAL, Jacob II., *Naauwkeurige Waarneemingen. Van veele Gestaltverwisselende gekorvene Diertjes*, Amsterdam: Changuion en Esveldt, 1740.

著者のヤコブ・ラドミラル 2 世（1694-1770 年）は、父の代にフランス・ノルマンディー地方からオランダに移住しているが、昆虫学の中でもとりわけ蝶の変態を専門にしていた。本書は副題にある通りオランダ、フランス、イギリスで観察した昆虫が対象となっており、昆虫のみならずそれらが食している野菜類についても細かく描写しているため、植物学的にも重要である。本書の刊行は 1740 年にはじまるが、この時点では 33 点の図版のみであった。しかし著者の死後、この原版は博物学者のマルティヌス・フートゥンの手に渡り、彼の手によって 1774 年に改めて出版された。

図 21 『昆虫の変態観察記』

⑯ ヘルマン・カルステン『ドイツの植物』ゲーラ：オイゲン・ケーラー , 1880 年刊行開始（図 22）

KARSTEN, Hermann, *Flora von Deutschland*, vols.1-30, Gera-Untermhaus: Eugen Köhler, 1880-.

著者のヘルマン・カルステン（1817-1908 年）はドイツ・メクレンブルクのアカデミックな家庭に育った。祖父は農学者のロレンツ・カルステン、父はプロイセン政府に勤めたクリスティアン・カルステンであった。ヘルマンはベルリンとロストックで学んだ後、1843 年には南米に渡り、ベネズエラ、グラナダ、エクアドル、コロンビアなどを訪問している。その後は、ベルリンおよびウィーンで植物学の教授をつとめ、ベルリンには植物学の研究所を開設した。

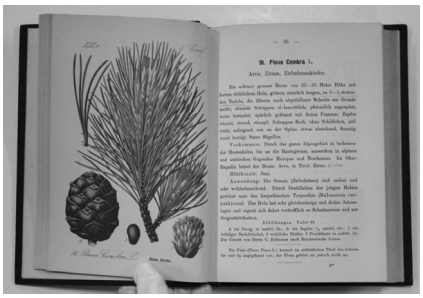

図 22 『ドイツの植物』

⑰ ゴットヒルフ・シューベルト『植物界の博物誌』『動物界の博物誌』エスリンゲン：シュライバー , 1872 年刊（図 23）

SCHUBERT, Gotthilf Heinrich von, *Naturgeschichte des Pflanzenreichs / Tierreichs*, Esslingen: J.F. Schreiber, 1872.

著者のゴットヒルフ・ハインリッヒ・フォン・シューベルト（1780-1860 年）は、ドイツ・ホーエンシュタイン出身の哲学者・博物学者。当初は神学を学んでいたが、すぐに薬学に転向する。1803 年にはイエナで博士

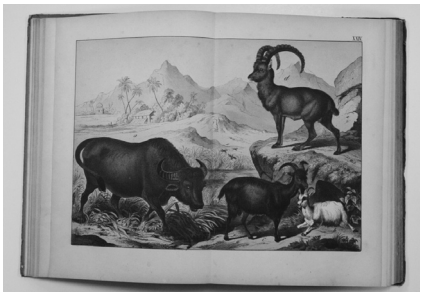

図 23 『動物界の博物誌』

号を取得し、物理学者としてドレスデンやニュルンベルクで教鞭を取る。1819 年にはエアランゲン大学の博物学講座の教授となり、1827 年以降はミュンヘンでも博物学を教授した。哲学者としては「無意識」や「夢」の研究で有名で、のちにフロイトらに影響を与えたほか、同時代のロマン主義詩人たちにも影響力があった。こうした多彩なキャリアは、シューベルトが地上の万物を宗教的に解釈しようとした研究態度によるものである。本書はシューベルトの没後にプラハ大学教授のモリツ・ヴィルコムが、シューベルトが生前に著した博物学の教科書を再版したもの。

（新潟県立近代美術館 主任学芸員）

Summary

Korean Folk Paintings and Old Picture Books from the Kamekura Collection

KO Seong-Jun

The former collection of the famous graphic designer KAMEKURA Yûsaku, now part of the collection of the Niigata Prefectural Museum of Modern Art, includes unique works such as Russian icons, Korean folk paintings, old European picture books and American duck decoys (man-made objects resembling real ducks). The aim of this article is to study the Korean folk paintings and old European picture books from the collection.

Collecting Korean folk paintings became popular with Japanese collectors in the 1970s and 80s when diplomatic relations between Japan and Korea were normalized and the Japanese economy experienced high growth. Kamekura was also one of such collectors, and he ultimately edited the book *Minga of the Lee Dynasty*, published in 1982. Although the project of publishing the book was brought to Kamekura by a producer named SHIWAJI Shôichirô, Kamekura became actively engaged in editing and designing the book. In the essay in the book, Kamekura writes: "I couldn't suppress my excitement because these pictures' fantastic ideas, fresh colors, superb compositions and geometric clarities dive directly into my eyes successively". In this article, the author describes in detail the symbolical meanings and artistic specialties of six Korean folk paintings from the Kamekura collection.

Another core of the Kamekura collection is old European picture books from the 18-19th centuries. These books contain beautiful copper-plate figures of plants, butterflies, birds and insects illuminated one-by-one by watercolor. Kamekura started to collect these books in the 1940s, and the final collection grew to approximately 20 books. In this article, the author translated the titles of the books into Japanese, and described the contents and the biographies of the authors of the books.

(Assistant Curator, The Niigata Prefectural Museum of Modern Art)